

道の 両側は、 雪が 積もって、まるで 白い じゅうたんでも しいたかの ようでした。その一方、 道の 真ん中に 積もった 雪は、 急ぎ足で 通り過ぎて行く 何百人もの 足で ふみ荒らされ、ぐちゃぐちゃに 茶色く なっていました。 今白は、クリスマスイブ。人々は 両手に 荷物を いっぱい かかえて、 急ぎ足で 通りを 行き交っていました。 人ごみを かき分け かき分け、声を かけ合って 笑いながら 通り過ぎていきます。

道の 上の 方では、昔から 立っている 年老いた カエデの 木が、空に 向かって 枝を のばしていました。強い 質が ふいてきて 枝々を わしづかみに し、地面に 向かって おし曲げると、カエデは ヒューンと 音を 立てて、 校を しならせました。カエデの 木の 下の 方からは、せせら笑いが 聞こえてきます。 見栄えの いい モミの 木が、気取って おい茂った 枝々を のばすと、粉雪が キラキラと 輝きながら、地面に 落ちていきました。



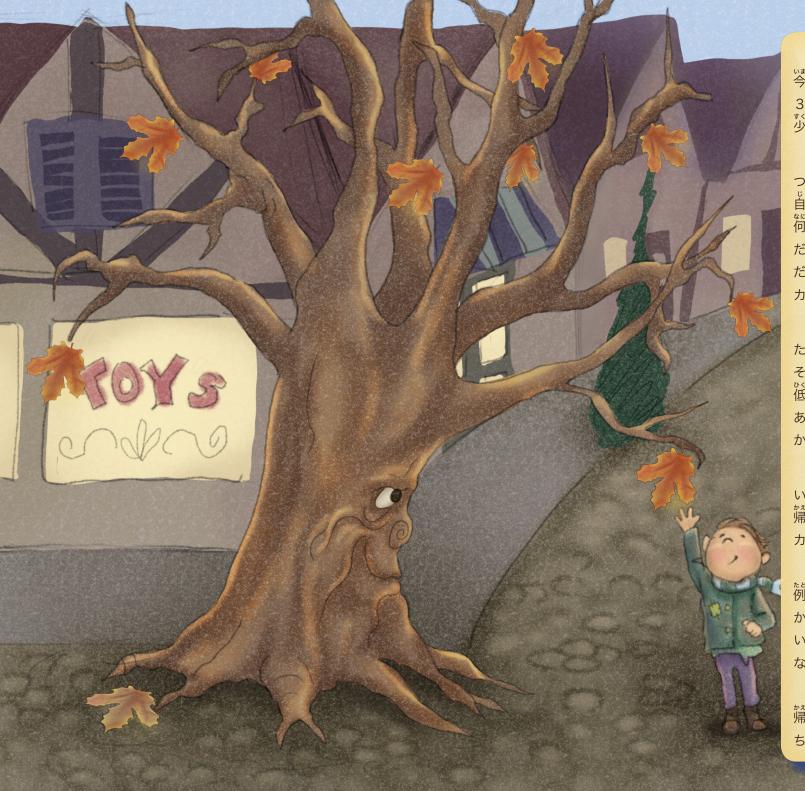
「そうじゃね。みんな、キリストの たん生を 祝って、最高に 美しく 着かざっておるからのう。ここから 見渡すと、どの 街角も、デコレーションで キラキラ 輝いておる。 そう 言って、年老いた カエデの 木は、ふっと ため息を つきました。すると、溶けた 雪の 結晶が 一すじの なみだのように、こぶだらけの みきを 伝い落ちました。

「全くですよ! しかも、あなたは 自分も ライトを かざってもらえると 思ったのですか? そんなことを したら、ますます みっともなく なるじゃ ないですか。」 モミの木がうすら笑いを浮かべながら言いました。

「お前さんの 言う 通りかも 知れん。クリスマスが 終わるまで、どこかに かくれて いられたらなあ。こんなに きれいな 街の 中で、わしだけが みっともないのに、 まだ ここに 立っておるなんてな。人間が 来て、わしを 切りたおしてくれれば いいのだが。」 カエデの 木は 悲しそうに 言いました。

「まぁ、ぼくも 悪気は ないんですよ。だけど、確かに あなたは みっともないです。いっそのこと、人間が 来て、切りたおしてくれたほうが いいのかも しれませんね。」





そう 言うと、モミの 木は 美しい 枝々を きょう こうと、モミの 木は 美しい 枝々を 今一度 のばしました。「せいぜい、最後の 3 枚の 葉を 落とさないように するんですね。」

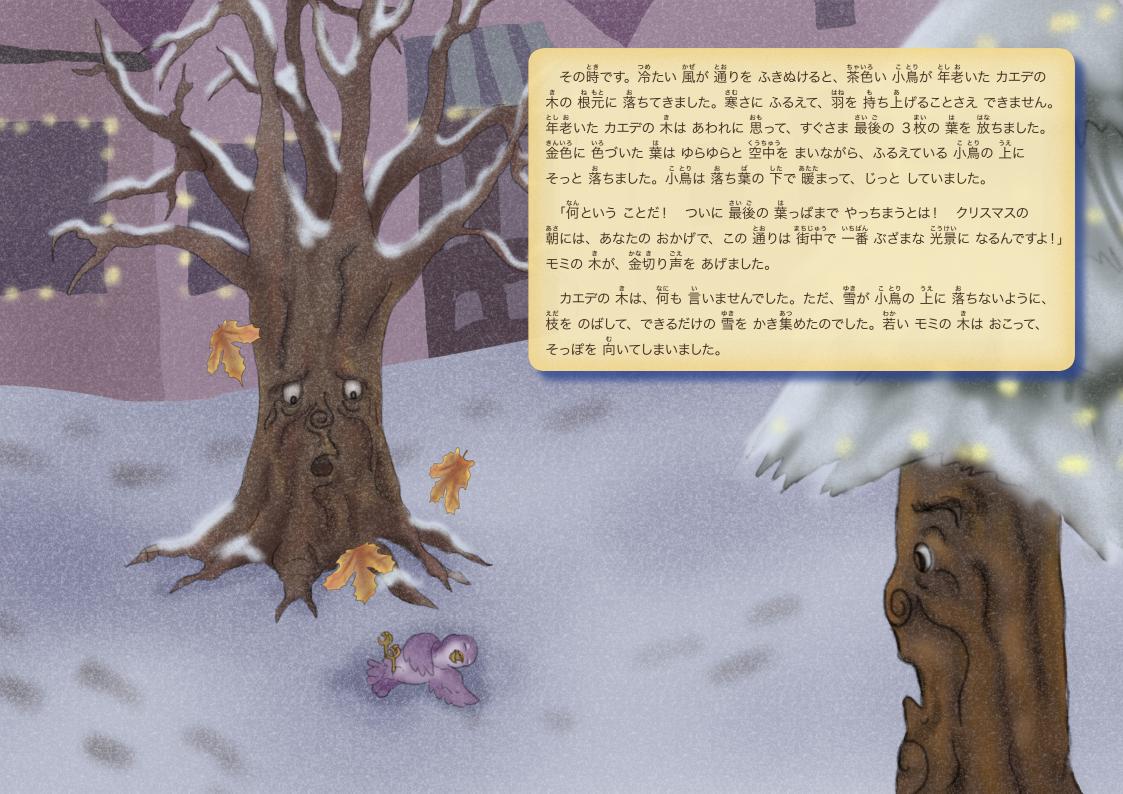
「葉を落とさんように、一生けん命やってるつもりなんだが。毎年秋になると、わしは自分に言い聞かせるんじゃ。『今年こそは、何が何でも、葉を1枚も落とさんぞ。』とな。だが、わしよりも葉を必要としているだれかが、いつも通りがかるんじゃ。」年老いたカエデの木は、またもやため息をつきました。

「あの うすぎたない 新聞少年には、そんなにたくさん あげるなって言ったじゃ ないですか。それなのに、あなたと きたら、わざわざ 枝を低くして、あの子が葉を取りやすいようにしてあげるなんて。ぼくは ちゃんと 注意しましたからね。」と、モミの木が言いました。

「ああ、そうだな。だが、あの 子は 喜んでいた。体の 不自由な お母さんのために 持って帰りたいと 言っていたなぁ。」と、年老いたカエデの 木が 答えました。

「みんな、もっともな 理由が あるんですよ。 例えば、あの 女の子だって、パーティーで かざるために、色づいた 葉を 使いたがって いたでしょ。葉っぱは 全部、あなたの もの なのにねぇ!」と、モミの 木が 言いました。

「あの 子は、ずいぶん たくさん 取って 帰ったねぇ!」 年老いた カエデの 木は、 ちょっと ほほえみました。

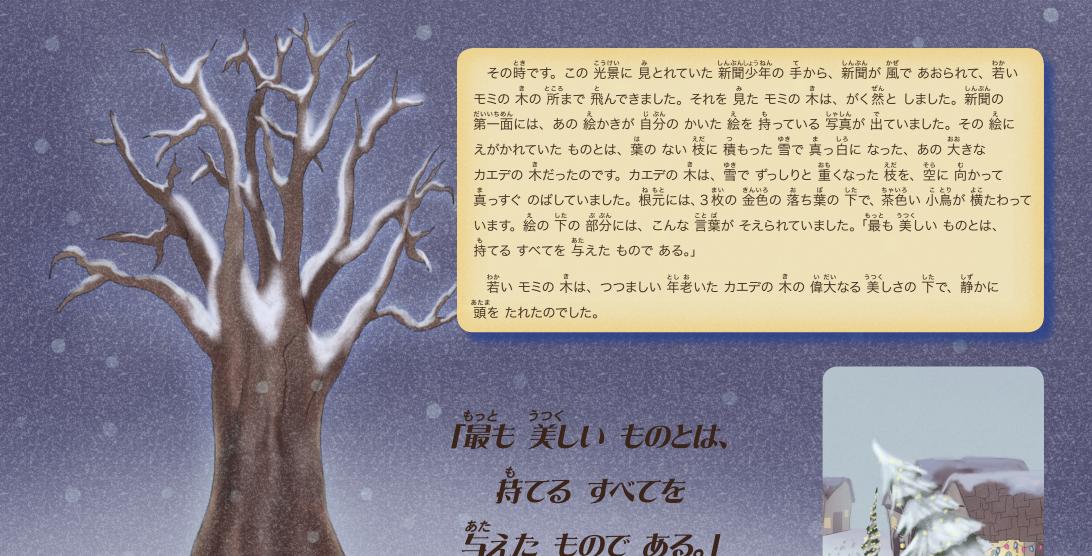






モミの木がクリスマスの朝おそく首を覚まし、自分のきれいな枝に積もった雪を得意気にはらい落としていると、年老いたカエデの木の間りに大きな人だかりができていたので、びっくりしてしまいました。人々は後ろに下がって木の上の方を見つめ、口々にうわぁ~と、おどろきの声をあげていました。道を急いで造り過ぎようとしていた人たちでさえ、立ち止まって、カエデの木を見上げているのです。

「一体、何だろう?」 もしかしたら 夜の間にカエデの木の てっぺんでも 折れたのだろうかと思って、うぬぼれ屋の モミの木も、上の方を見上げました。



作者不明 絵: Y.M. デザイン: ステファン・ミーラー 出版: マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2014 年、ファミリーインターナショナル "The Old Maple & the Fir" --Japanese http://www.mywonderstudio.com